道程　　岡本　悠

勢男は、コンドームを遂に、捨てた！

三軒茶屋の、中国人の風俗店に、よく通った

その女の名前は、ノラヨと言った

幾分、かわいいわけでもなく、

少し、太っていて

ぜいにく、もついていたが

なんとなく、ノリが良かった

電話番号を交換した

俺は、まだ、実家に住んでいたが

彼女は、１人暮らしだった

聴きやすい、カタコトの日本語を喋った

電車を乗り継いで、けっこう遠いところに住んでいた

途中の駅で待ち合わせをして

彼女の家に向かった

ノラヨは、大屋さんを警戒していた

おそらく、１人暮らしだから、男を上げるのはマズかったのだろう

それか、恥ずかしかったのだろう

ノラヨが、玄関のドアを開けた

すると、狼は吠えた

テレビドラマの男のように

ドアにカギをかけると

ノラヨをカベに押し付けた

そして、カベドンをすると

激しく、キスをした

ノラヨは「ちょっと待って」と言い

「ああ、ビックリした」と、少し笑った

そのあとは、ベッドで激しくセックスしたが

子供を恐れて、コンドームをつけた

準備したのは、ノラヨだった

俺も、それに同意した

祐輔の野郎が強がった

コンドームをつけてやった場合は、

まだ、本当にセックスをしたうちに入らない

また、駅で待ち合わせをした

途中で、アダルトビデオショップに２人で入った

女も入るというのは珍しい

店員は、意味深にこっちを見ている

倉木麻衣の名前をあやかって、改造したビデオがあったので、それを借りた

ノラヨは「恥ずかしい」と、あとで言っていた

ノラヨの家のビデオで、倉木のビデオを流した

そのイメージのまま、２人でエッチした

ビデオでも喘ぎ声が聴こえ

こっちでもノラヨの喘ぎ声が聴こえた

俺は、祐輔の言葉を破る為

１回、コンドームを外して、

ノラヨのアソコに差し込んだ

これで、正式に童貞は去った

エッチが終了しても

倉木のビデオは、流れていた

喘ぎ声は、鳴り響いていた

電話が鳴った

「さみしい」

「俺も、さみしいよ」

ただ、ノラヨの寂しいの意味は、わからなかったが

俺も、合わせただけなのか、人生が寂しいのか、わからなかった

ある時は、コスプレを要求した

じゃあ、学生服を、

と言うと、駅で、学生服で現れた

ある時は、エッチをしたが

コンドームが破れてしまい

精子が、直接、入ってしまった

ノラヨは、慌ててシャワー室に行き

アソコを洗っていた

国語の先生は

昨日、ヤッタゾと言った男子生徒に

子供にだけは、気をつけろ

と、言っていた

一緒に、東京ディズニーシーに行った

アトラクションには、長蛇の列ができていた

並んでいたのだが、

急に、彼女が、柵のひもを飛び越えて

列を飛ばして乗ろうと走った

俺は、仕方なく、その後ろを追った

周りでは「おい、ズルするなよ！」と、罵声がこだましている

俺は、駄目だと、追っているフリをした

そして、ノラヨが、そのアトラクションにつくが

あっけなく係員に「駄目です」

と、言われると諦めた

俺は、その係員に言葉がわからないフリをして

何も喋らなかった

日本人じゃないフリをして

さりげなく、出た

罪をかぶらないように

得てして、この結果で満足した

違う、乗り物に乗った時

エレベーターのように上にのぼる時

少し暗くなったので

ノラヨを抱きしめて

アソコに指を入れた

正直、俺も、こういうスリルを体験したかった

ただ、子供２人連れの若い女性が

ずっと、こっちに視線を送っているのが見えた

そこまでの快感はなかった

観覧車では、飽きるほど当たり前にキスをした

結婚をしよう

と、言われた

彼女の家の中で、

海外旅行のパンフレットが並んでいた

俺は、稼いでもいないのに、できるわけがないと思った

ある人からは、

中国人が国籍を欲しいから、結婚したいだけだ

とも、言われた

それとは別に、テレビや家族も、同じようなことを言っていた

まあ、そもそも無理ではあったが、

この時、１度でも、結婚してたら違ったかなあ、とは、よく思う

せめてもの救いは、俺が決めたから、ということだった

その日、なぜか、あまり、金を持っていなかった

ノラヨの家のほうへ行った気がする

ノラヨは電話で、激しく、家族らしい人物と口喧嘩していた

俺の前で、こんな姿を見せたのは、初めてだった

ノラヨは定食屋で、チャーハンが食べたいと言った

俺は、この場合、自分がおごるのかな、と、わからなかった

ノラヨは、当たり前にそのつもりだった

俺は、とにかく、金が少ないことが気になった

帰りの電車賃足りるかな、と考えていた

そして、俺は、２人分の会計を払った

そして、バイバイを言い、結局は帰れたのであった

それが、最後に会った姿だった

ノラヨから電話が来た

最近は、しょっちゅう、かかってきていた

俺は、イラついてしまった

「もう、かけないでくれ！」

ノラヨの反応は、憶えていないが

それ以来、１度もかかってこなくなった

結婚を申し込まれた女性なんて、人生でノラヨだけだ

あの頃は、若かった

俺の、人生はあの時、決まったのかもしれない、結婚においては...

「完」